二〇一八年度　外国学生入学試験問題用紙（日本語・小論文）

問題　以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

同じ物事でも、言語によって切り取り方が違うということから、辞書的には一つの語に多くの訳語が与えられる、あるいは逆に多くの語に一つの訳語しか与えられない、という現象がみられる。

たとえば、「すべての人間はこの世に命を授かり、生活し、一生を送る」の傍線部分「命・生活・一生」を英語で訳し分けることは難しい。手元にある『ジーニアス英和辞典』の【life】を引いてみると「生命、命、生き物、寿命、生活、……」のような訳語が記載されている。「人生」という訳語が見当たらないので、和英で【人生】の項を引いてみると、これもlifeがあてられている。【生涯、一生】も同様である。

英語のlife一語にほぼ相当するものが、日本語では細分化され重層的に捉えられている。そこで「人生」と「生活」はどう違うのかということが、英語を母語とする人を対象にした日本語教育の現場で問題になったりする。そのような問題を解決するためには、「人生」と「生活」という語自体がどのように用いられているのか実例をまず列挙し、そこから答えを導き出すようにするのが常套手段である。

たとえば、「人生相談」と「生活相談」のように「相談」という語をつけてみる。私の語感では、「人生相談」では恋愛・結婚・就職など、将来を左右する重大事を相談するが、「生活相談」ではゴミの出し方、消火器の入手方法など日々の事柄が問題になる。しかし、別の人の語感では「人生相談」は私と同様であるが、「生活相談」は生活補助など経済的な問題が主であるというようなことがある。

いずれにしろ、「生活」は日々の暮らしの中の活動に視線が行っており、それが日本語で「生活する」のようにサ変動詞として用いられたり、中国語で動詞として用いられたりすることと関係があると本書では考える。一方「人生」は、それ自体をトータルなものとみているということができるだろう。「人生」と「生活」とでは、そこで生起することが違う。

また、「寿命」はその時間的長さに比重をおいたものであり、しかも個人それぞれに与えられた『定め』という感じが強い。ちなみに『定め』のことを現代中国語では〈命〉という。「運命」の「命」である。

life一語に相当するものを、我々はなぜこのように多くの言い回しで細分化しているのかということ自体、たいへん興味深いことである。一般的には、日本で雨や魚、中東ではラクダに関わる表現が多いといったことから、生活に密接な関係があってなみなみならぬ関心をもつ領域で細分化されるという言い方がなされるが、それだけで説明できるものではない。英語の話し手が人生や寿命に関心をもたないということは想定しにくいからである。日本語の問題としてさらに興味深いのは、これだけ多様な表現がすでにあるのに、さらに「ライフ」という英語までも取り込み定着させようとしていることである。

ことばは(狭い意味での)意味を伝達するだけのものではない。伝達内容に対する話し手の態度(モダリティーと呼ぶ)、さらには話し手の年齢、性差のみならず教養やファッション感覚をも同時に伝える。筆者は言語のファッション的な側面はいくら強調してもしすぎることはないと思う。それが言語変化の大きな原因の一つになっていると考えている。

ここでいうファッション感覚とは、『まだ使用に耐えるのに使いたくないという感覚』のことである。漢語の大量受容の千数百年前から今日まで、日本人はこの面にことさら熱心であった。「都会生活」があるのになぜ「シティーライフ」が必要なのか。一つには、「生活」の場で行われるゴミ出しなどの日常的営為に伴う生活臭を払拭したいのであろう。生活感の希薄さがファッショナブルなのである。語は長く使用されることによって、リアルになる、しかしその分、手垢にまみれる。ファッショナブルなことに大半の価値がある服装・化粧品など、我々はどれだけことばを更新してきたかを考えれば思い半ばに過ぎるというものであろう。新奇さを追い求めるのには外来語が手っ取り早い。

（中川正之『漢語からみえる世界と世間』）

設問1

右の文章の内容を、一六〇字以上、二〇〇字以内で要約しなさい。

設問2

右の文章に現れた生活の場面における言語的な行動について考えたことを、あなたの経験を踏まえて、三六〇字以上、四〇〇字以内で答えなさい。

二〇一八年度　外国学生入学試験解答用紙（日本語・小論文）

受験番号	
フリガナ	
氏名	

採点欄　設問１
採点欄　設問２

設問１

（たて書・２００字）

200　100　25

設問２

（たて書・４００字）

400　300　200　100　25

（注）表面のみを使用すること。

早稲田大学社会科学部